

【学校教育目標】 自分とみんなのために 心を尽くし、学びを深め、ともに動く 大小っ子の育成
【目指す児童像】 気づく子 学ぶ子 元気な子

玖城のほとり



大村市立大村小学校
令和8年度学校だより
第3号
令和8年5月22日発行
文責：校長 堺 邦寿

★ いよいよ日曜日は運動会！ ～天気もどうかよさそうです～ ★

いよいよ、今週末の日曜日は運動会です。私は、学校行事の際、いつも4社の天気予報アプリで確認していますが、一週間前の予報では、4社とも雨。それも運動会の前々日からずっと。順延を何曜日まですればいいのか心配したほどでしたが、その一週間後には、一週間前の予報とは打って変わって、前々日から月曜日まで晴れの予報に。ある学級の窓際には、てるてる坊主がいくつも飾られていましたので、きっと大小っ子のみんなの願いが天に届いたのだと思います。このまま晴天になってくれることを願うばかりです。

さて、今年度の児童会スローガンは、「自分とみんなのために、協力し合う大小っ子」。そのスローガンのもと、一人一人の努力はもちろん、学級や学年、学校のみんなで力を合わせ各種目や応援練習などに取り組んできました。水曜日には、総練習を行いました。開会式では、話す人の方を見てよい姿勢で話を聞く姿、ダンスでは、満面の笑みで楽しそうに体全体をつかってはつらつと踊る姿、短距離走やリレーでは、全力で走り、バトンをつなぐ姿などなど、総練習の段階から子どもたちの活躍が輝いていました。

新年度が始まって間もない時期の開催ということで、特に、1年生の子どもたちには負担も大きかったことと思いますが、子どもたちは、本当によく頑張りました。当日、保護者の皆様には、輝く大小っ子の姿に多くのご声援をいただきたく存じます。どうぞよろしくお願いいたします。



■ 各色応援団長からひとこと ■

運動会では、応援合戦も見ものです。6年生を中心に各色、応援を考え、昼休みなども使って練習を重ねてきました。今年度はプログラム2番目に行います。お楽しみに。各色の応援団長から応援の見所や決意を書いてもらいましたので、ここで紹介します。

赤組団長 6年 さん

明るく元気いっぱいの赤組です。最後に帽子を投げるところが見所です。

青組団長 6年 さん

青組は揃えるところを意識しました。みんなの笑顔もぜひ見てください。

緑組団長 6年 さん

緑組の応援は、複雑なふり付けが多いので、そこがそろっているかが見所です。

黄組団長 6年 さん

最強のチームワークとパワフルな応援で優勝目指し、最後まで頑張ります。

※裏面に、木村指導教諭作成の特別支援教育だより（みんなちがってみんないい）を載せています。どうぞお読みください。

～みんなちがって みんないい (その2) ～

今年も今回は「応用行動分析学(ABA)を用いた子育て・教育」についてお話しします。

「応用行動分析学 (ABA)」はアメリカの心理学者バラク・スキナーが提唱した行動分析学が基礎になっており、「人の行動は過去の行動結果に依存し、もし過去の行動結果が悪い物であれば、その行動は繰り返されない確率が高く、良い結果であれば何度も繰り返される」という「強化理論」に基づいた行動療法の一つです。

現在、教育だけでなく、スポーツコンサルタントや会社経営等の分野でも「応用行動分析学」を用いた「人材育成」が浸透していて、経営管理職研修内容にも入っているほどです。「応用行動分析学」によって人間の「行動が変わる」ことは実証されており、「人を育てる」上で有効であることが広く知られています。

「子育て」や「教育」における「応用行動分析学」の効果について簡単にお話しします。

「応用行動分析学」を使った子育てのキーワードは、「良くないことをしているのに、報酬を与えてはいけない」です。

人の行動は条件によって決定づけられていきます。良い行動も悪い行動も、条件によって強化されたり弱化されたりします。

一昨年、「買い物中の子どもの行動と親の対応」についてお話ししました。泣いてお菓子をせがむ子どもに、周りの目を気にしたり根負けしたりして、一度でもお菓子を与えてしまうと、以後、行動がエスカレートしていくという話でした。

子どもは相手を試します。「どんな行動を取れば相手は自分の要求をかなえてくれるだろう」という駆け引きを繰り返します。

「後で絶対に宿題するから、もう少しだけゲームをさせて」という要求を親に提示した時、「じゃあ約束ね」と言ってゲームの延長を許すと、子どもは本当に約束を守るのでしょうか？

「応用行動分析学」のキーワードを踏まえると「交換条件には乗らない」が正解です。このような条件の提示は「お試し行動」です。「お父さんお母さんはどんな交換条件を出せば、自分のいうことを承諾するだろう」と子どもは親を試しています。親が忙しく、時間が無いときを選んで交換条件を提示してくることもあります。一度、交換条

件をのんでしまうと、必ず次も同じ要求をしてきますし、突っぱねると更なる激しい行動（例えば泣いたり叫んだり、物を壊したり家を飛び出たり）などの抵抗を見せるかも知れません。根負けして許してしまうと、「良くないことをした」⇒「欲しいものが手に入る」という経験を重ねることで「負の行動」を「強化」していくことになります。これがスキナーの言う「人の行動は過去の結果に依存する」ということなのです。

前述のゲームの場面においても「約束を守らなくても、少し叱られただけで許された」という経験があれば、今後も口約束を守ることはありません。そうならないためには、「延長をさせないこと」が最優先ですが、もし子どもの要求を受け入れたときは「必ず宿題をさせる」「約束を守った時はしっかり褒めて、褒美を与える」ことで約束を守る習慣が身に付いていきます。

これらの行動や習慣は、子どもに限らず大人も同じで、人の行動は過去の経験と結果に依存し強化されていきます。

約束を守らせること、守れたら報酬や承認（誉め言葉等を含む）を与えることに、より良い行動や習慣は身に付いていきます。

もちろん子どもの特性や思春期の不安定さも関係していますが、もし子育ての中で「子どもが言うことを聞かない」「育てにくい」と感じているのであれば、少なからず間違った対応の積み重ねが関係している可能性は否定できません。こうして積み重ねられた人格形成は、成人後の性格にも反映されます。

子ども達のこのような行動は学校でも同じように見られるので、我々職員も「応用行動分析学」に則った対応を心掛けています。

具体的には、普段から普通にできていることを褒めたり励ましたりするように心掛け、困った行動にはなるべく反応せず、できていることを認めるようにしています。誰もが不安や自信の無さ、不得意なこと苦手なことなど、何らかの困り感を抱えています。そのことに寄り添うことも大切ですが、それ以上にできていることを認める・褒めることの方が大切です。

この理論を日常生活の様々な場面に置き換えて考えてみてください。子育てのヒントがたくさん生まれてくるのではないかと思います。